

大日本帝国の〈包摂〉と〈排除〉 ——佐藤春夫の「日章旗の下に」をめぐって

張文聰

1. はじめに

植民地台湾の日本語文学を語る際には、佐藤春夫を抜きにしては考えられない。それは佐藤春夫が日本近代文学史に重要な位置を占める作家だからというだけではなく、彼が実際に台湾に来て、都市部のみならず山間部にも訪れ、一連の台湾関連作品を書き下ろしたからである。1920年、佐藤春夫は当時台湾で歯科病院を開業していた中学時代の親友、東熙市に誘われ台湾に来た。また、台湾総督府で台湾原住民研究をしている森丑之助と、同じく和歌山出身の総督府民政長官の下村宏のアドバイスで、台湾西部平野の都市を南から北まで回り、阿里山、日月潭、霧社など、台湾原住民が暮らしている山間部も訪れた。そのほか、台湾海峡を渡り、福建、廈門にも行った。この台湾旅行はおよそ100日だった。佐藤は日本に帰って四年後の1924年、『新潮』6月号に「旅びと」を、翌年1925年には『改造』3月号に原住民と内地人警察との殺傷事件を描く「霧社」、『女性』5月号に「女誠扇綺譚」を発表した。そして1928年『女性』1月号に「奇談」を発表した。また、台湾旅行の14年後の1933年には『中央公論』9月10月両号に「植民地の旅」が発表された。これらの作品と、書き下ろしの「かの一夏の記」合わせた計六編は全て、1936年に東京の昭森社から刊行された作品集『霧社』に収録されている。

佐藤春夫は旅行者として、定住者と違い、他者という立場で台湾を描いた。また1920年代という台湾日本語文学の黎明期に、佐藤春夫は台湾関連作品群に漢民族と日本人との間の問題だけではなく、原住民にも関心を寄せていたので、戦前の台湾文壇において既に注目されていた。当時台北帝国大学教授を務めていた島田謹二は、1939年『台湾新報』に「佐藤春夫氏の「女誠扇綺譚」という文章を発表した。そこでは佐藤の「女誠扇綺譚」は「とにかく台湾人の民族的特性を意識して書こうとし、作品の背景に意味あらしめえたのは文学史的に新領土を開拓せるものといわねばならぬ。こういう二点からいえば、この物語は台湾に取材せる散文小説のうち殆んど空前にして唯一というべく、またその文学的価値からいっても断然群れを抜いて王座に就いていると言うべきである」¹と絶賛されている。また、島田は「女誠扇綺譚」を「一種の文明批評を加へようとした外地紀行の典型的佳作である」²と評し、「素材と取扱ひの二方面から見て典型的な異國情趣（エグゾチズム）の文學なのである」³という評価をした。この「外地紀行」あるいは「エキゾチズム文学」といった、佐藤春夫の台湾関連作品に関する評価は、戦後も90年代初頭まで長く影響を及ぼした⁴。

- 1 初出は1939年の『台湾新報』だが、本論は下記の単行本から引用した。島田謹二「佐藤春夫氏の『女誠扇綺譚』」『華僑島文学志』明治書院、p.382、1995
- 2 前掲書、p.355
- 3 前掲書、p.363
- 4 蜂矢宣朗「霧社」『天理大学学报』24(5)、1973。蜂矢宣朗「文芸作品に描かれた霧社事件」『山邊道：国文学研究誌』(20)、1976。河原功「佐藤春夫『植民地の旅』をめぐって」『成蹊国文』(8)、1974。邱若山「佐藤春夫台湾旅行行程考」『稿本近代文学』15、1990などが、この論の延長線上にある。

90年代に入って、台湾日本語文学研究にかけられた呪縛が解けると同時に、佐藤春夫の台湾関連作品を読みなおす動きも出始める。藤井省三は「大正文学と植民地台湾」という論文で、「佐藤はその歴史の中でも大正期から昭和初期にかけて、友愛の眼差しを中国・台湾のナショナリズムに注いでいた」とし、また「佐藤は冷静な観察を通して教化される先住民の不幸を示唆し、総督府の強圧的な政策を遠回ししながら批判している」⁵と、佐藤春夫の台湾関連作品を「外地文学」の枠から引き出し、当時の政府を批判する意味を込めて、別の意味において東アジアの平和の可能性を秘めていたのではないかと再評価をした。この再評価の意味は大きく、現在に至る佐藤春夫の台湾関連作品の読まれ方に強く影響している。

2000年代以降、台湾文学における原住民や、ジェンダーなどのマイノリティ問題について研究が展開する中、佐藤春夫の台湾関連作品への関心は冷めることなく、更に拡大しているようにも見える。和泉司⁶は、島田謹二の論文から出発して、1940年代の台湾文壇にいた在台日本人作家、例えば新垣宏一、西川満らが、どのように「女誠扇綺譚」を受容し、反応していたかを明らかにした。そして、台湾の日本語文学における「日本人作家」の多様性を強調している。磯村美保子⁷は、「植民者であることを自ら当然視する姿勢は佐藤にはなかった」と佐藤春夫を評価し、「女誠扇綺譚」における「台湾が体现するチャイニーズネスの境界、そこに生きる女性の問題について」考察した。磯村はさらに佐藤春夫の「魔鳥」に視野を広げて、「植民地下の台湾原住民がいかに周辺化されたか、更に原住民の中で日本兵に犯され、「魔鳥使い」とされた原住民女性が最終変化される過程を追う」⁸ことによって、「植民者・被植民者という関係だけでは語らない多重性をそこに見ることができる」とする。河野龍也⁹は、語り手が「支配者の立場から植民地について語ることの決定的な無力さと限界を探り当てた」として、「女誠扇綺譚」を評価した。その後河野は佐藤春夫の台湾滞在に関する事実調査に力を入れており、実際に台南に足を運んで、近年データベース化された資料から当時の新聞記事や土地資料まで、地道にテキストに沿って調査確認をして「女誠扇綺譚」物語の周辺や当時の空気を復元した¹⁰。宮内淳子・福島理子¹¹は、当時の新聞記者と読書人の角度から、植民地台湾における言語の政治性、あるいは漢文脈によって結ばれた植民者である語り手と読書人の「世外民」との絆や共感について論じた。呉光輝・杜海懷・呂綺鋒¹²は、佐藤春夫の「南方紀行」を分析し、佐藤の中国観に「憧憬」と「批判」が入り交じった「二元論的構造」があると指摘した。

「女誠扇綺譚」も「霧社」も単行本のタイトルになっており、佐藤春夫文学において代表性のある作品であることは疑う余地がない。それゆえ「女誠扇綺譚」や「霧社」などの先行研究はかなり蓄積があるが、本論はそうした研究動向から見落とされてきた「日章旗の下に」という作品を分析する。本論で、なぜあえて「日章旗の下に」という作品に注目するのかといえば、未検討の問いが残されているからだ。まず、「日章旗の下に」は『霧社』において唯一改題された作であるとい

5 藤井省三「大正文学と植民地台湾—佐藤春夫『女誠扇綺譚』、『台湾文学この百年』、東方書店、pp.79-103、1998

6 和泉司「日本統治期台湾文壇における『女誠扇綺譚』受容の行方」(『藝文研究』83、pp.20-42、2002

7 磯村美保子「佐藤春夫の台湾体験と『女誠扇綺譚』—チャイニーズネスの境界と国家・女性」『金城学院大学論集・人文科学編』2(1)、pp.52-74、2005

8 磯村美保子「佐藤春夫『魔鳥』と台湾原住民—再周辺化されるものたち」『金城学院大学論集・人文科学編』3(1)、pp.55-66、2006

9 河野龍也「佐藤春夫『女誠扇綺譚』論—或る〈下婢〉の死まで」『日本近代文学』75、pp.103-118、2006

10 河野龍也「『女誠扇綺譚』と台南—一世外民たちの横顔」『佐藤春夫と大正日本の感性—物語を超えて』、鼎書房、pp.237-281、2019

11 宮内淳子・福島理子「佐藤春夫『女誠扇綺譚』論：植民地の新聞記者と読書人を視座として」『帝塚山学院大学研究論集』51、pp.1-23、2016

12 呉光輝・杜海懷・呂綺鋒「文学的表象とポジションの移転：佐藤春夫の『南方紀行』を中心に」『東アジア文化交渉研究』(10)、pp.211-223、2017

う特徴をもつ。雑誌『女性』での初出では「奇談」という題名だったが、単行本収録時に改題されている。それはなぜだろうか。「日章旗の下に」は、佐藤春夫の初めての台湾関連の作品集『霧社』の冒頭作品である。つまり、『霧社』全体の性格を規定する作品とも言え、この改題には看過できないものがある¹³。「奇談」から「日章旗の下に」への改題に注目することによって、単行本『霧社』の同時代的な立ち位置、つまりナショナリズムおよび植民地主義との関係を明確にしたい。

また「日章旗の下に」は、「植民地」内部の階層性について示唆を与える作品である。「日章旗の下に」の先行研究では、佐藤春夫の作品中に表された「植民者」と「被植民者」の関係性や、あるいは「中国観」や「漢文調」に焦点が当てられてきた。言い換えれば、「日本」と「中国(アジア)」、あるいは「宗主国」と「植民地」の関係について研究がなされてきたといえる。ジェンダー研究の視点による先行研究も、「植民者(男性ジェンダー)」対「被植民者(女性ジェンダー)」の対立関係に注目した。しかし、本論では、植民者内部の差異について考えたい。「日章旗の下に」は、明治初期にインドやアフリカに奴隷として売られ、やがて自由になりアフリカで農園を経営するまでになって、日本領有後の台湾に移民してきた松原夫婦の物語である。語り手の台湾総督府の役人は内地からの旅人に、庭の「松原朝顔」というアフリカから渡来した花の由来として、夫婦の物語を話す。夫婦は台湾最南端の恒春に入植したが、殺されてしまったのだった。最初犯人は原住民ではないかと噂されたが、台湾人盗賊団の仕業だと最終的に判明したという。松原夫婦の物語は、「日本」と「中国」、あるいは「宗主国」と「植民地」という二項対立には取まらないものだ。それは、植民者は一枚岩ではないということを示している。植民者の多様性を論じた研究としては、小熊英二が「日本」対「植民地」という図式に疑問を呈し、「日本」や「植民地」内部の多様性に目を向け、さらに「欧米」という日本の外部にある植民者を加えた検討を行っている¹⁴。また台湾植民地史研究でも、従来の欧米中心の植民地研究方法論で日本の台湾支配を見る見方には問題が多いと指摘されており¹⁵、日本の台湾支配は西洋型植民地的ではない¹⁶と指摘されている。本論でも、大日本帝国が台湾を領土として支配し台湾原住民と漢族系台湾人を日本人に組み込むという意味での「植民地主義」を念頭に置きながらも、植民者の中にも〈中心〉と〈周縁〉があり、階級、地域、ジェンダーなどによる階層化がなされていることに目を向けたい。「日章旗の下に」は、このような植民地での階層性を浮かび上がらせる作品として読める。そのような新たな論点を示すことによって、佐藤春夫の台湾関連作品における複数の力学の混在を明らかにすることができるだろう。

2. 「奇談」改題の必然性

「日章旗の下に」は雑誌『女性』の1928年1月「新年特別号」に「奇談」という題で掲載された。『女性』は1922年5月に創刊され、1928年5月号まで刊行された

13

余談だが、『霧社』が出された二年後、偶然にも佐藤春夫は同じ「日章旗の下に」という歌詞を作った。それは1938年毎日新聞の懸賞で「日の丸行進曲」のいうレコードのB面にある、中山晋平が作った曲である。歌詞自体は国家に忠義を尽くすという、戦争が緊迫しかけた時代によくあるもので、本作品とは直接の関係はないと見てよいであろう。

14

小熊英二『「日本人」の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復讐運動まで』、新曜社、pp.5-9、1998

15

檜山幸夫「日本の外地統治機構と外地支配について—「植民地官僚」「植民地大学」論への問い—」、『台湾植民地史の研究』、ゆまに書房、pp.17-18、2015

16

東山京子「台湾統治の構造と台湾総督府の組織機構」、『台湾総督府の統治政策』、中京大学社会科学研究所、p.244、2018

商業女性雑誌である¹⁷。「日章旗の下」は次の一文から始められる。

ベランダの籐椅子に倚りかかりながら、シャワアの後の一杯のビールに口を濕しながら、この家の主人は旅の客に話すのである。¹⁸

「縁側」ではなく「ベランダ」で涼み、「お風呂」ではなく「シャワア」で済ませて、「お酒」ではなく「ビール」を飲むなど、日本人が見慣れた日常の風景を少しずらして、物語の舞台は日本にないような雰囲気醸し出している。

「日章旗の下」の語りの構造は奇妙で複雑である。一番外郭にある層は、一人称で語られた、「この家の主人」と「旅の客＝記者＝私」の会話にあたる部分である。ここにおいて「主人」が松原夫婦の物語を語りはじめ、語り手の「旅の客＝記者＝私」が聞き手となる。ただし、松原夫婦の物語が終わるまで「旅の客＝記者＝私」は極力その姿を隠している。最後に松原夫婦、特に妻の経歴を聞き出すところで、語り手は「私はやつと初めて口を利いた」と語り、一瞬だけ姿を現す。このような語り方によって、ある種の客観性、あるいは距離感が保たれている。

松原夫婦の物語になると、語り手は「主人」に変わり、一人称となる。つまり、この語り手の「私」は作品全体では「あなた」とされる人物であり、「松原夫婦」はさらに遠い位置にあるという配置となっている。

松原夫婦の出自や経歴は、都市部に生活している日本人にとって想像しがたいものであり、詳しくは次節に説明するが、「この家の主人」も下記の部分に示されているように、いわゆる「日本人像」からややずれがある。

それに私自身が十八の時に戦争が始まったと聞くと家を飛び出して、殆ど即席仕込みのやうな南京官話で陸軍の通譯官にされたかと思ふともう戦争がおしまひになつたのが残念で、再度志願して臺灣へまはして貰つて、その用事がすんでもまだ内地へは歸らうとしない男なのを御承知になつたなら、私が松原に同感した理由は別に述べるまでもありますまい。そのころ、私たちのやうな青年は日本にはざらにあつたものです。既にここにも我々の仲間に、同じやうなのが四人までみて、それが皆すぐさま松原の友人になつたのです。(p.9、下線は筆者による、以下同)

ここには、時間の距離が示されている。この「戦争」は言うまでもなく1894年の日清戦争である。「日本にはざらにあつた」、「用事がすんでもまだ内地へは歸らうとしない」人々は、日本から海外へディアスポラしていく人々である。小説の中において、「この家の主人」は総督府の官僚であり、彼がなぜ日本を出て、歸らうとしないのか、その理由は明かされていないが、政府によって台湾に派遣されたのではなく、自ら志願して日本を離れたとあるので、海外へ出稼ぎをする移民労働者の動機に近いと言える。当時、移民労働者は珍しくないものの、『女性』がターゲットにしていた都市部に住む、中流以上の出身の女性読者¹⁹には遠い存在かもしれない。

17

本誌の紹介は、以下の論文をご参照ください。津金澤聡廣「雑誌『女性』と中山太陽堂およびプラトン社について」『雑誌『女性』第48巻：解説・総目録・執筆者索引』、1993

18

佐藤春夫「日章旗の下」『日本植民地文学精選集台湾編5『霧社』』ゆまに書房、p.5、2000

19

『女性』の定価は普通号70銭で、『婦人公論』の定価50銭、『女人藝術』の40銭に比べ、かなり高価である。雑誌の執筆者群をあわせて見ると、この雑誌は中流以上の家庭出身で高度な教育水準を持つ女性をターゲットにしていたと思われる。また、雑誌の広告欄を見ると、「河北新報」や「名古屋新聞」の広告もあることから、『女性』は日本全国の都市部に広く流通していたと思われる。

「松原夫婦」物語の時間は、明治初年代から、明治29(1896)年までで、「この家の主人」と「旅の客=記者=私」の会話の時間はその約二十年後、およそ1920年頃となり佐藤春夫自身の台湾旅行とほぼ重なる。それゆえ松原夫婦の物語の時間は、1928年『女性』の1月号を読む読み手とは約30年以上の時間差があることになる。「日章旗の下に」においては、読み手のリアルタイムにおいて「松原夫婦」の物語が語られるのではなく、入れ子の中に包み込まれ、物理的にも心理的にも時間的にも、かなり距離を置かれているのである。作者が「伝聞」という形を重ねることで、虐殺された「松原夫婦」物語の残酷性、怖さは希薄になる。松原夫婦が物語の当事者だとすると、「この家の主人」は準当事者となり、「旅の客=記者=私」はその準当事者の言葉を伝える、より距離の遠い者である。「日章旗の下に」の読者は更に外部に配置されるので、松原夫婦の「当事者性」の温度が伝わらなくても当たり前のように思われる。原題「奇談」に示されているように、本作品は『女性』の新年特別号において、こうして様々な距離がつくられたことで、少し怖いけれども、物珍しく奇妙で遠い物語として消費され得たのである。

だが、『女性』で読者と距離のある「奇談」として読まれたこの物語は、単行本収録時に改題された。この改題から一体どのような意味が読めるか。「日章旗の下に」という改題は、「大日本帝国」のナショナリズムを前景化している。「日章旗の下に」の内部と外部の「時間」を整理してみると、この物語が「大日本帝国」のナショナリズムをいかに語ろうとしたのかが明らかになる。

1928年雑誌『女性』から1936年に単行本『霧社』に収録された際、内容には大きな改稿はされていない。にもかかわらず「日章旗の下に」に改題しなければならなかった理由は何だろうか。まず、外部から考えられることを検討しよう。1928年から1936年までの間には、二つの大きな事件が発生している。一つは1930年の霧社事件で、もう一つは1932年の満州事変である。満州事変は中国東北地方における日本と中国(当時は中華民国)との武力衝突だった。結果的に満州国が成立して、日本の大陸進出の始まりとなり、第二次世界大戦の前触れともなった。霧社事件は、1930年に起きた台湾原住民による日本植民時期後期最大規模の抗日運動だった。「日章旗の下に」を収録した単行本タイトルが『霧社』であったことから、その影響の大きさが窺われる。東アジアでは日本の中国進出が進むことで軍事的緊張が高まり、第二次世界大戦前夜とも言える状態であった。同時に、台湾の内部でも大きな事件が発生したために、植民地政策は大幅に変更された。そのような状況のなかでは、『霧社』の冒頭作品を単に「奇談」として済ますことができず、「日章旗の下」に改題し、「大日本帝国」のナショナリズムに結びつくタイトルとしたのではないか。「奇談」は植民地主義とナショナリズムの内側に配置し直されたのだと言える。

3. 「奇談」を語る語り手の物語

次に、「この家の主人」（松原夫婦の物語を語るときの「私」）がどのような人物なのかについて、検討したい。

前節にも述べたが、「この家の主人」は松原夫婦と同じ、海外への移民労働者に近い存在である。彼が日本を出た動機は何なのか、なぜ戦争の報を聞いてすぐに従軍したのだろうか。またなぜ松原に同感するのだろうか。第一には前述した「日本人アイデンティティ」があると思われるが、「用事が済んでもまた内地へ歸らうとしない男」というくだりに注目したい。つまり「この家の主人」は、内地で継ぐべき家も土地も職業もないから、用事がすんでも帰らうとしないのだろう。言い換えると、「この家の主人」も松原と同じ下層の貧困階級出身ゆえに松原に共感するのではないか。

日清戦争は日本が明治維新以後初めて経験した外国との大規模戦争であり、「国家」が「国民」に兵役などの「義務」を要求するのにつれて、近代的「国家」および「国民」の意識が誕生していった。そして貧困層の男子も兵役を通して食料や衣類の配給を得、さらに近代的な軍隊に入ることによって、封建的な社会、つまり代々受け継がれる階級＝貧しい「家」から脱出することが可能になった。「この家の主人」は貧困層の息子から、「家を飛び出して」陸軍の通訳官になり、台湾総督府の「役人」になった。言い換えれば、これは一種の近代的「立身出世譚」と言ってよい。作品の結末からは「十二になる可愛い女の子」という娘を持ち、一家の主である「父」になったこともわかる。

このように、一人の男性が兵役を通して近代国民国家の国民になって、近代家族の父親になったのは当たり前のように見えるが、すべての人がそのようになるとは限らなかった。上野千鶴子は『ナショナリズムとジェンダー』にて、「国民国家」に即して言えば、「近代化プロジェクト」は別名「国民化」のプロジェクトと呼ぶこともできる。ところで地政学的・人口学的に定義された「国民」は、当然排除を伴う定義を必要とする。考えてみれば「国民化」のプロジェクトはその当初から、「境界の定義」と「再定義」の連続であった²⁰と論じた。松原夫婦はまさに排除された側で、自ら「国民化」しようと努力した。語り手の「この家の主人」とは好対照だった。

また、西川祐子が「多くの国家は、かぎられた数の男性市民を主権者と見なして出発した。（中略）共和制の理想は、すべての国民がいずれかの家族に属し、家族が国家をおおい、家長たちは主権者として、お互いに平等の資格で主権の行使あるいは、国家に対する主権の譲渡を行う体制であった。女性を排した男性市民が主権者として集合する形をとった²¹と指摘した通り、近代国民国家としての大日本帝国には、前近代からの男性中心社会と家父長制が受け継がれて、国民化が行われ、近代家族を形成させた。もちろんその過程はすんなりとはいかなかった²²が、「日章旗の下に」には、上述した近代的国民国家、そして近代的家族＝家父長制の論理が見出される。また、「この家の主人」が総督府の官僚で

20

上野千鶴子、『ナショナリズムとジェンダー』、青土社、p.26、1998

21

西川祐子『近代国家と家族モデル』、吉川弘文館、pp.12-13、2000

22

上野千鶴子が公教育の義務化に関する抵抗や、明治六年の徴兵制反抗の血税一揆などを例として挙げた。上野千鶴子、『ナショナリズムとジェンダー』、青土社、p.28、1998

あることも、彼が大日本帝国に包摂され、ナショナリズムと植民地主義を象徴することといえよう。

一方、彼の語りにはナショナリズムと植民地主義に疑いを差しはさむところがある。最も顕著な箇所は、彼の「蕃人」に対する見方である。

私は戦争がすんで、もう通譯官など必要でなくなると、^{マニラ}藩地を踏査してみたいといふ志を立てて、さう奥深くない場所はもうその時多少歩いてみてみました。(さうです、その後約三十年近くの私の生涯の大部分は蕃山で暮らしたわけです。)²³

23

佐藤春夫「日章旗の下に」『日本植民地文学精選集台湾編5『霧社』』、ゆまに書房、p.10、2000

と語っているように、彼は自ら志願して「蕃人」と関わろうとした。しかし彼は「蕃人」を前近代的、あるいは未開な野蛮人として、蔑視しているわけではない。「蕃人であらうか何であらうが、折角人が大切にしている所を、そんな所よりももつと誰もさう重寶がらない所の方が、開拓しがいいもあるからね(p.11)」と言うように、植民地統治の権力を振るい、土地を取奪するのではなく、「蕃人」も「人」であるという、平等な立場をとっているとわかる。さらに、植民地政府と「蕃人」と衝突があった際の処置に関する、「この家の主人」の立場の特異さは際立っている。

一度その地方で蕃人が亂暴を働いた事があつた時、それを討伐してその代表者として頭目が臺中の憲兵の手につかまへられて殺されようとしてゐるのを、私が命乞いしてやつた事があつたのです。頭目を殺して見たところが、一時の見せしめになつても、永い目では決して好結果ではない。(中略)さういふ方法が蕃人の習慣にも協い、従つてその意味が彼らにも納得しやす^い上に、(中略)私は憲兵隊の知り合に自分の意見を述べ、(中略)頭目の命は今度だけ見逃すといふことに處置をしてもらつた事件がありました。(p.12)

この一節はやはり1930年に起こった「霧社事件」を想起させる。1895年日本が台湾において植民地統治を始めてから、各地に抗日運動が蜂起した。平野部の漢民族による抗日事件は1915年の「西來庵事件」を境目にして、武装抗日から社会運動や政治運動を中心とした文化抗日運動に転じた。しかし山間部の原住民は30年の霧社事件まで日本の植民地統治に抵抗しつづけた。結局、霧社事件は数百名の原住民が自殺もしくは死亡し、頭目のモーナルダオも自殺する惨劇になった。「日章旗の下に」は霧社事件より二年先立って1928年に発表されたが、原住民との衝突への対処法は全く違うように見受けられる。「この家の主人」は「永い目」をもって、「蕃人の習慣にも協い」、「彼らにも納得」させようとしており、頭目の命を助けたり、再三「蕃人」に処罰への対処法などを教えたりした。結果として「蕃人」に愛され、「その部落全體がひどく私を徳としてみてる(p.12)」という、非常に良好な関係が結ばれた。後に起こった霧社事件の結果と比べると、「この家の主人」の考え方は当時の台湾総督府による植民地統治に提

言するだけでなく、その植民地統治を暗に批判していると言えるだろう。

また、植民地統治というのは、被支配民族に、近代化をもたらし、彼らの文化や習慣を「改良」するのだと考えられた。しかし、「この家の主人」の語りは、このような一方的な論理ではない。

或るアメリカ人の書いた本に、やはり臺灣の生蕃が赤ん坊をくれると言った事を記して、多分それを御馳走にして食べろといふ意味だらうと解してありますが、それは全くの誤解で、ここの蕃人には食人に習慣は絶対にありません。(p.14)

「この家の主人」は必ずしもアメリカ人を近代的で、正しく、見習うべき存在としては見ておらず、蕃人を前近代的で改良すべき存在として見ていない。植民者として被植民者を同化していく考えも持たず、頭目が感謝のしるしとして送ろうとする赤ん坊を辞退して、かわりにトンボ玉をもらおうという、「蕃人」の風俗や習慣をそのまま受け入れたのである。「この家の主人」はナショナリズムと植民地主義の象徴である一方、日本のナショナリズムと植民地主義に対して、不協和音を奏でているのではないか。

4. 軋み合う二つの力学

本論では、この作品を「奇談」と「日章旗の下に」という二つの力学が混在するテキストとして読んでみたい。それでは、小説の内側に目を向けよう。はじめに、松原夫婦がどのような存在なのかを確認する。松原は以下のような人物である。(下線は筆者、以下同)

約二十年前に日本の土地を離れて以来、奴隷になつて印度からアフリカの諸方を賣られながら流浪し、最近では或もののかつた英國人に助けられて、その親切からやつと奴隷の境界を放れ、最初にはその主人の助力によつて、後には獨力で、アフリカにささやかながら一個の農園を営んでみた。しかしその舊主人には一昨年死なれてしまふし、身は日本人だといふので事毎に肩身が狭い。国内にゐる人は何も氣がつかないかも知れないが、海の外では日本人は黒ん坊も同じものである。今まで身に覚え込んでゐる侮辱は數限りもない。(pp.6-7)

松原は日本人だが、日本の外に「奴隷」として売られ、生活していた。当時の読者にとっては、具体的に想像することの難しい生活であろう。そして松原の妻について語り手は以下のように語っている。

松原には細君がありました。海外を流浪してゐるうちに偶然に知り合つたといふのですがやはり日本人でした。仲のいい夫婦で、彼らはいつどこ

でも、ふたりづれで歩いてみました。この當時の日本の風俗からいふと、夫婦づれで歩くなどといふことは珍らしかつたのです。細君はまだ三十になるかならないかの人でしたが、十二の時から国外にゐたというので様子もどこか外国人染みて風俗もすつかり西洋風で、それに馬などへも上手に乗りました。煙草を好きで、それに酒も少しは飲みました。ごく快活な性質で、松原とは全く似合いの夫婦でした。私たちは松原君とその細君が来たので、自分の生活が賑やかになつたやうな感じがした程でした。彼らは下手な、訛りの多い日本語を使ひました。夫は九州の南部だつたし、細君は長州の日本海に面した地方の生れだといふことでした。私たちがその下手な日本語を時々笑ふと、彼らはこれでも日本の言葉を忘れてはならないといふので、毎日夫婦して稽古してゐたのだ、とさう眞顔で答へた事がありました。(pp.9-10)

また、「記者」である旅客が夫婦の過去について聞いたシーンを、語り手は以下のように語っている。

もとは船乗りで船の中で喧嘩をしてシンガポールへ着くと、上陸したまま船へは歸らなかつた。陸では言葉がわからないのでだまされて人に奴隷に賣られたのだといふ事が、自分でも後に気がついた。細君は十二の時に人買に浚はれて、やはりシンガポールで曲馬團に賣られた。松原はそんなことを少し詳しく話出して、傍には日頃快活な細君はちつと沈み込んで、聞いてゐるなどと思つたら、彼女は思ひがけないヒステリカルな聲で「そんなことは言はないで下さい。そんな事を人に知られるくらゐなら、私は死んでしまひます！」とわめき出したと一緒に、その場へ泣き崩れてしまつたのです。(p.20)

松原夫婦物語の時間は「明治二十九年のたしかに春であつたかと思ひます」とあるので、松原もその妻も、明治初年代から10年代初頭に日本を離れたと考えられる。夫の方は「奴隷」として売られたと明確に書かれたののに対して、妻の方は「十二の時に人買に浚はれ」、「シンガポールで曲馬團に賣られた」という曖昧な書き方しかされてない。ただ、タバコやお酒を嗜んでおり、海外での境遇を話させようとする「思ひがけないヒステリカルな聲」で泣きわめいて「死」を口にするほどである。松原の妻も夫と同じく人身売買をされて海外に「出稼ぎ」をした女性なのではないかと考えられる。つまり、松原の妻はいわゆる「からゆきさん」だったのではないだろうか。

「からゆきさん」とは19世紀後半に、東アジア・東南アジアに渡って、娼婦として働いた日本人女性のことであり、長崎県島原・熊本県天草出身の女性が多いといわれている。「からゆきさん」の出現は近代ではなく、近世からの地続きとして現れたものである。嶽本新奈は以下のように指摘している。

明治政府の買売春政策においても、前章で確認したように近世と同様に買売春への否定や倫理的判断が見られないままに、むしろ女性の「供給」過程に伴う人身売買の側面の払拭を目的として、本人同意の上であるならば「救貧」のために公許するという点で連続性を持っていた。／だからこそ、「密売淫」が増加しているのは、「活計に困る者」が多い故なので、「活計の目処」が立つよう上海で「娼妓渡世」をさせたいとする出願の論理は、まさに近世から近代に続く公権力の買売春施策と一致する内容であり、上のような記事が一八七九(明治一二)年に掲載されるのはそれほど奇異なことではなかった。²⁴

24

嶽本新奈『「からゆきさん」—海外(出稼ぎ)女性の近代』、共栄書房、p.49、2015

つまり、江戸時代から近代に至るまで、九州南部の貧困層に起こっていた人身売買によって、男性は「男性的身体=労働力」の、女性は「女性的身体=性/セックス」の商品として海外に「輸出」されていたのである。公権力の介入によって、このような人身売買はあたかも個人の意思のあるように「救貧」という体面のいい言葉の裏に隠されていた。

物語の現在では、松原は農園の経営者で、妻も「家庭の主婦」という身分を持っていたが、松原夫婦が貧困家庭の出身であったのは間違いない。そして海外では黒人と同様の差別を受けて辛い思いをしたのだった。しかし語り手は妻が「からゆきさん」だった過去を隠し、二人の経歴を淡々と語り、むしろ「一個の農園を営んでみた」という〈中産階級〉のように描写する、さらには「自分の生活が賑やかになつたやうな感じがした」という部分を付け加えることで、不穏な部分を覆い、安全に着地させようとしている。その意味で、「日章旗の下に」は「からゆきさん」の物語ではなく、「からゆきさん」が「家庭の主婦」へと回復した、いわば「ポストからゆきさん」の物語であるということができよう。

このように、松原夫婦は当時の「典型的」な日本人が持たない経歴を有している。語り手はそれを「どこか外国人染みて風俗もすっかり西洋風」として〈美化〉しようとしており、松原夫婦という外部からの異質な存在を単に「当時の日本の風俗から珍しい」、「いつどこでも、ふたりづれで歩いてゐる」仲のいい夫婦」に書き換えようとした。

この近代の「からゆきさん」と「立身出世譚」の物語がセットになって、「日章旗の下に」に組み入れられていることは単なる偶然ではないだろう。「この家の主人」の物語では、貧困層の息子が従軍して「国」に忠誠を尽くし、植民地経営に携りながら、ようやく一人前になって、庭のある屋敷と可愛い娘を持つ理想的な近代家族の父親になったのである。同様に、「からゆきさん」であった松原の妻は人買にさらわれてシンガポールに売られたが、松原に出会って結婚したことによって、「松原の妻」となり、近代的家族の枠組みの中に居場所を見つけた。一度は外部へとこぼれ落ちた女性が最終的には近代的家族の秩序に戻る「ポストからゆきさん」の物語が語られている。

また、松原夫婦が、この小説を読んでいる読者と違う点は、彼等が近代的な

教育を受けたことがないということである。二人は「下手な、訛りの多い日本語を使う」。それは、近代的な教育に組み込まれた「標準語」ではなかった。このことは語り手によって馬鹿にされているが、松原夫婦は積極的に「日本の言葉を忘れてはならないといふので、毎日夫婦して稽古してゐて、涙ぐましい努力をしている。しかし、どれほど努力をしても、松原夫婦は「標準語」を獲得することができていない。日本の周縁から日本の外部に追いやられた人間は、どれだけ努力しても「日本人」になれないことが仄めかされている。松原夫婦の「奴隷」と「からゆきさん」の問題は、日本から切り離されていった人々の物語なのである。前節に述べた語りの構造における、読者との距離をより明確にし、「奇談」としてこの物語を提示しているのである。

5. 松原朝顔の越境—「日章旗」への回帰と排除

では、この小説はどのような力学の作用で、「日章旗の下に」となったのか。次に、松原夫婦がシンガポールから台湾に入植した経緯を辿ってみたい。松原は台湾に来る前、総督府に手紙を書いている。その手紙には台湾に行きたい理由と躊躇する理由が書かれている。

…身は日本人だといふので事毎に肩身が狭い。国内にゐる人は何も気がつかないかも知れないが、海の外では日本人は黒ん坊も同じ者である。今まで身に覚え込んである侮辱は数限りもない。どうにかして、自分の生まれた國の旗の下で生きてみたい。事業をするのなら日章旗の樹つてゐる所、という考えは今日や昨日に始まつたものではなかつたけれども、十七の歳に國を出たきり、歸つて見たところで寄邊もあるわけではないし、又これぞと言つて格別に身を助けるやうな職も藝も覚えてゐない自分を省みるとただの一時の感情にまかせて故國へ歸つてみたところが、有金を費つた後では食ふに困るやうな結果に成はしないかと思ひかへしては、いつも躊躇してゐた者である。熱帯地方の生活には永年慣れてゐるし、また外の職業は出来なくとも土地の開墾には多少の経験もあり、さう考へると矢も楯もたまらなくなつて、農園は捨てるがごとく賣拂つて一氣にシンガポールまで來たのであるが、²⁵

25

佐藤春夫「日章旗の下に」『日本植民地文学精選集台湾編5『霧社』』、ゆまに書房、p.7、2000

以上を整理すると、松原夫婦が台湾に来たかった理由は三点にまとめられる。①海外で差別されている。②日本に帰りたくて、日章旗のある所で事業を始めたい。③日本に帰っても親類もなく生活していくための技術もないが、台湾なら熱帯に慣れてゐるし、土地開墾にも経験がある。という三点にまとめられるだろう。躊躇する理由はただ一つ、日本は台湾を長く経営するつもりはないという噂を聞いていることだけである。①も②も「日本人」というアイデンティティに関わっているものと考えられる。ここからは海外で「他者」として差別さ

れた経験が、受動的ではあるが日本人アイデンティティを芽生させていること、そこから「日本に帰りたい」、「日本人として生きていく」、「日本で事業を始めたい」という、明確な日本人アイデンティティを能動的に持つようになったというプロセスが見てとれる。ここは改題後のタイトル「日章旗の下に」の由来に当たる所だろう。

しかし、松原夫婦の切実な訴えが記されたこの手紙は、「日本人」としてのアイデンティティと「大日本帝国」のナショナリズムを強化しているとともに、逆に彼らが「大日本帝国」に排除された、「日本人」といっても周縁的な存在であることを浮き彫りにしている。松原夫婦がかりに日本に戻ったとしても、もはや居場所がないということを語っているからだ。台湾は「日章旗の樹つてある所」ではあるが、日本そのものではない。

日本の政府は臺灣を持ちあつかつてゐるから、これを占領したといふのも一時の名ばかりで、今に再びもとの支那か、でなければどこかへ手放すのが關の山だらう²⁶

26
同注14

松原夫婦が台湾を選んだ理由は、日本に戻ることを躊躇する理由と表と裏になっている。それは、日本人が植民地経営をする際の考え方に連動している。表側には植民地経営に対する興味があるが、裏側には、政府が本格的には植民地を経営しないだろうという懐疑的な見方がある。作中の、松原夫婦が台湾に行きたい理由にはリアリティがあり、論理的で説得力がある。つまり、松原夫婦は「日本に帰りたい」、「日本人として生きていく」、「日本で事業を始めたい」という、明確な日本人アイデンティティを強く持ってはいても、〈本当の〉日本には帰れず、日本ではあるが日本ではない台湾に帰る資格しかないのである。松原夫婦は、〈本当の〉日本人にはなれなかったのだ。永遠に「排除された者」として生きていくしかないのである。しかしその遠ざかった場所から、彼らは日本への帰還を願望し、台湾まで移動してきた。日章旗の下へ向かって、二人は移動してきたわけである。こうした登場人物の移動は、「奇談」からナショナルな枠組みの物語への移動でもある。

松原朝顔という植物の情報が最初の一ページあまりで紹介されている。松原朝顔は松原夫婦のメタファーであり、同様の移動をしている。松原朝顔は小説の冒頭で「名も無い花」といわれて登場した。「臺灣の草原ならどこにでもいよというほど茂(傍点原著者)」っているといい、日本にないから日本の名前がなく、学名もないので、松原夫婦物語の語り手「この家の主人」に松原朝顔と命名された。「臺灣にありふれた」というから台湾在来種の植物かと思われるが、すぐ松原夫婦がアフリカから持ってきたものと明かされたが、にもかかわらず同時に「全く、日本的な花」と説明されている。花は朝顔に似て、葉っぱは麻に似てるから、「日本にあつたものとしても少しも不似合ではない」、「日本的ななつかしみがあつたからかも知れ」ないと松原夫婦が台湾に持ってきた理由を推測している。

松原朝顔は、松原夫婦がアフリカから持ってきた唯一の植物ではない。松原夫婦は「臺灣の風土をもつと熱帯的だと思い込んでみたらしくて、他にも植物の種を持ってきたが、一つも育たなかったという。これは日本の植民者と同じなのである。例えば、日本植民地時代に、南洋をイメージして旧台北帝国大学（現在の国立臺灣大学）や、各地の高等学校に、椰子の並木道を作ったが、台湾の気候に合わないため、現在は毎年高額な維持費と多くの人力を費やして保存に取り組んでいる。松原朝顔が台湾の風土に適していたのは、偶然であろう。植物の移入をめぐるエピソードは近代的で合理主義を唱える植民地統治の誤謬や非合理的な一面をあぶり出す。植民者が勝手に想像した表象を植民地にあてはめても、それらのものは根付かない。ほとんどは、松原夫婦のように命を落としてしまうのである。また一方で、「今ではこの島の雑草の中でも一ばん目ぼしいものになつた」というように、臺灣中に蔓延した松原朝顔は外来種の植物として、在来種の植物を脅かす存在にもなる。これまた、植民地主義の問題を比喩する事態と言えよう。

松原夫婦は日本を出て、アフリカにたどり着き、台湾に来て命を失った。松原朝顔はアフリカから台湾に来て栄え、今度は「この家の主人」によって「旅の客の記者」への手紙に入れられ、日本に向かう。人物の移動も植物の移動も、両者とも自らの意志での越境ではなく、外力による越境である。松原朝顔は松原夫婦の亡くなった二十年後に、日本に持ち込まれるが、松原夫婦は故国に帰ることなく、排除されたままだ。

「日章旗の下に」の終盤で、周縁に配置された松原夫婦は犠牲になって死んでしまうが、犯人は「蕃人」ではない。松原夫婦を殺したのは「支那人の土賊」、「臺中の附近でつかまへた強盗の一團」である。「日章旗の下」における未開の民は「蕃人」だけではない。

日本が台湾を支配した時、近代的教育などを通して、台湾人を「日本人」に教育していった。つまり台湾人を「近代化」した。しかし、この小説において「近代化」されたのは「支那人」、つまり漢族系台湾人なのである。すでに指摘されているとおり、佐藤春夫の中国観には、伝統的中國への憧憬と近代中國への嫌悪という構造がある。それは決して対立的なものではない。そこには、憧憬と批判、期待と失望、受容と拒絶などが入り混じっており、そのありようは当時の日本知識人に広く共有されたものでもある²⁷。佐藤春夫の台湾観のこのような二元論的な構造では、台湾原住民「蕃人」への共感と台湾漢民族「支那人」への嫌悪が同時に発生している。しかし植民地経営の文脈では、両者とも「大和民族」に「同化」しなければならない。『霧社』が出版された翌1937年、台湾総督府は「皇民化運動」をはじめた。『霧社』はそのような大きな流れの一部なのである。物語の結末では、凶悪な「支那人の土賊」は「白状して」、「みんな銃殺され」て、排除された。「奇談」から「日章旗の下に」と改題し得たのは、こうした力学が描かれていたからである。しかし、物語の語り手の「この家の主人」はその力学に対して、摩擦を与えている。「日章旗の下に」はこのような帝国の亀裂を内包した物語である。

27

呉光輝・杜海懷・呂綺鋒「文学的表象とポジションの移転：佐藤春夫の『南方紀行』を中心に」、「東アジア文化交渉研究」第10号、p.223、2017

6. 結び

「奇談」が「日章旗の下に」と改題されて、単行本『霧社』冒頭の一作として出版された1936年は、奇しくも台湾総督が文官総督から再び武官総督になった年である。この転換は、当時日中戦争の白熱化と無関係とは考えられない。迫り来る戦争に対応すべく、台湾を南進基地として備え、台湾人を大日本帝国の臣民として同化していく「皇民化運動」が進められた。佐藤春夫の台湾関連の作品は日本の「内地」にいる読者に「外地」だった台湾を紹介することで評価されてきたのであり、帝国主義、植民地主義と無関係なものではない。

「日章旗の下に」の主人公・松原夫婦は近代日本に排除された人だった。彼らは台湾を開墾すること、つまり植民地経営に参加することによって、祖国「日本」において「再国民化」されたのだといえる。「蕃人」や「支那人の盜賊」など、台湾の前近代的な要素も近代的な秩序の中に再配置された。「日章旗の下に」に示された佐藤春夫の台湾観は、まさしく大日本帝国のナショナリズムそのものである。

しかし「日章旗の下に」は大日本帝国のナショナリズムへのノイズも内包していた。内地から来た記者という語り手は物語り全体を包んでいるが、松原夫婦の物語を語る「この家の主人」は、近代的「立身出世譚」を体現する大日本帝国のナショナリズムと植民地主義の象徴でありながら、それを批判する語りも同時に持ち合わせている。彼が持っている「蕃人」への共感や、寄り添う姿勢は、佐藤春夫の台湾原住民への関心が、先行した「霧社」などの作品から引き継いだものであると言える。「霧社」や「女誠扇綺譚」ほど注目されるわけではないが、「日章旗の下に」が、短いながら、植民地統治の力学と矛盾を巧妙に描いたことを評価したい。

また、今日の視角から見ると、「そもそも「奇談」として語られたこの物語は、植民地主義から逸脱する部分をも含んでいる。植民地経営に参加した松原夫婦は盜賊に殺されて、志半ばで倒れており、また彼らが帰った「日本」は日本であって日本でない植民地台湾だった。「再国民化」も「ポストからゆきさん」の物語も完遂されることはなく、中断されている。このように読めば、「奇談」であり、「日章旗の下に」でもあるこのテキストを、植民地主義への痛烈な批判として読むこともできるのではないか。日本帝国のナショナリズムに召喚された松原夫婦の徒労は、まさに植民地主義の限界を示している。

本論は雑誌『女性』1928年1月号に掲載された「奇談」について考察し、「大日本帝国」の「国民」形成の物語としての側面を明らかにした。特に、「奇談」が「日章旗の下に」へと改題された論理が近代的国民国家と近代的家族＝家父長制の論理であったことを論じた。ただし、初出では「奇談」として語られたこのテキストには、より複雑な問題が語り込まれてもいる。もちろん「内地」にいる読者は、精巧に設計された小説を通して「外地」である植民地を知る。読者と物語との間の距離によって、読者の「安全性」は担保され、「命を以て植民地を開拓した

日本人」という表象の消費と、読者を「国民化」がなされる。「奇談」はそのようなテキストである。その意味で、小説は帝国の論理から逃れるものではないが、植民地表象における植民者の構成は単純なものではないと示した。そこにはジェンダーや、地域、階級などの要素が交差している。佐藤春夫は「霧社」に台湾原住民を描き、「女誠扇綺譚」に台湾漢民族を描いた。いずれも植民者と被植民者の対立という図式が成り立つ。一方、「日章旗の下に」では、その図式を脱し、植民者内部の問題性、非均質性を暴き、大日本帝国に〈包摂〉されたもの、〈排除〉されたものを描いた。「日章旗の下に」を読み直すことによって、佐藤春夫の台湾関連作品における、新たな地平が見えてくる。